

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

情緒や論理の深度を深める言葉を増やすためには、やはり読書が一番の早道だということになります。

直接的に目に入ってくる「活字」に気をとられてよくわからないことが多いのですが、本を読むことの本質とは、じつは筆者との「対話」にあるのです。

教育学者の齋藤孝さんがいろいろなところで述べていますが、読書で何がすばらしいかというと、たとえば極端な話、源氏物語や、万葉集でも平家物語でも何でもいいのですが、千年以上前の人間、しかも歴史を代表する知性や感性を持った人物とだって対話ができるということなのです。あるいはドストエフスキーやトルストイを読むということは、時代が百年以上違う、しかも外国の、直接には決してコミュニケーションをとることがまったく不可能な天才たちと対話をしているということです。

目で活字を追いつつも、筆者の声が聞こえてくる感じがつかめることが、本を読めばいつでもというわけにはいきませんが、確かにあります。

そのことを本当に実感したことがあります。

私はゲオルク・ジンメルという約百年前ドイツで活躍した

コミュニケーションの本質って、じつはこういうところにあるんじゃないかと思えます。

具体的な人との関係でも、漫然と言葉を交わしているだけではダメなのです。

ちよつと心地よくなると、すぐその場を放棄できてしまう言葉がいくつも準備されていて、自分の感覚的なノリとかリズムとか、そういうものの心地よさだけで親しさを確認していると、やはり関係は本当の意味で深まっていきません。料理でいうと「苦み」のない、ただ甘いだけの料理を求めてしまう感じですね。

ノリ、リズムだけの親しさには、深みも味わいもありません。そればかりか、友だちは多いのに寂しいとか、いつウラギられるかわからないとか、ノリがちよつと合わなくなってきたらもうダメだとか、そういう希薄で不安定な関係しか構築できないものではないかと思えます。

読書のよさは、一つには今ここにいない人と対話をして、

情緒の深度を深めていけること。しかも二つ目として、くり

返し読み直したりすることによって自分が納得するまで時間をかけ理解を深めることができること（実際の会話では

「えっ、今なんて言ったの。もう一度言ってみて」、なんて

何度も聞きなおすことはできませんものね）。あと三つ目と

社会学者の研究を①センモンにしている、数年前に『ジンメル・つながりの哲学』（NHKブックス）という本を書きました。その作業中、まさに百年前にドイツで生きたジンメルという人間と、「どうなの？ これどうなの？」という会話をしている実感があつたのです。たしかにそこまでのめり込むにはそうとうな集中力を要します。でも、真剣にある程度耳を傾けようとするれば、へいま・ここにはいない筆者と、いつのまにか直接対話しているような感覚を味わえることもあるのです。

みなさんでしたら、大好きな小説家、詩人、歴史上の人物でもいいでしょう。本の世界に没頭していくと、文字を通して、書き手や登場人物のニクセイがなんとなく聞こえてくるような感覚、コミュニケーションがだんだん双方方向になつていく感覚が生じてくることもあるのです。

もちろん本を読めばいつでも、というわけにはいきませんが、でも、私が『つながりの哲学』を書いていたときは、「ジンメルだったら今の日本をどういうふうに見るんだろうな」というようなことを、ずっと考えながら執筆していたので、なんとなく彼がいつのまにか今の時代にタイムスリップしてきて、今の日本を見ながら私に語りかけてくれているような気分になっていました。

しては、多くの本を読むということは、いろんな人が語ってくれるわけですから、小説にしても評論にしても、「あ、こんな考え方がある」「ナルホド、そういう感じ方があるのか」という発見を自分の中に取り込めるということ。実際の付き合いではそんなにいろいろなキャラクターの人とコミュニケーションするところがありますよね。でも本を読む上では作者でも登場人物でも、いろいろな性格の人と比較的楽に対話することができます。その結果、少しずつ自分の感じ方や考え方を作り変えていくことができるわけです。そういう体験を少しずつ積み重ねることは、多少シンDOI面もありますが、慣れてくると、じつはとても楽しい作業になるのです。

（菅野仁『友だち幻想』筑摩書房）

一部、表現や表記を改めたところがあります。）

注1 ドストエフスキーやトルストイ……ロシアの小説家。

注2 漫然……はつきりした目的や意識もなく、ただなんとなく物事を行うさま。

注3 希薄……ある要素がとほしいこと。密度がうすいこと。

注4 シンDOI……つらい。苦しい。

問一

——線①②③を漢字に改めなさい。

問二

——線④の熟語の組み立ての説明として正しいものを選び、記号で答えなさい。

ア 意味の似た漢字を重ねたもの

イ 反対または対になる意味を重ねたもの

ウ 上の漢字が下の漢字を修飾するもの

エ 下の漢字から上に返って読むもの

問五

——線2「コミュニケーションがだんだん双方向^{そうほうこう}になつていく」とありますが、筆者はこのことを文中では何と表現していますか。最も適切な熟語で答えなさい。

問六

——線4「料理でいうと「苦み」のない、ただ甘い^{かま}だけの料理」とありますが、これは何のたとえですか。文中から十字以内でぬきだして答えなさい。

問三

□ A に入る漢字一字を選び、記号で答えなさい。

ア オ イ 大 ウ 聖 エ 貴

問七

——線5「そういう体験を少しずつ積み重ねることは、多少シンドイ面もありますが、慣れてくると、じつはとても楽しい作業になるのです」とありますが、なぜ「シンドイ」と同時にそれが「楽しい作業になる」のですか。それぞれ説明しなさい。

問四

——線1「筆者の声が聞こえてくる感じがつかめることが、本を読めばいつでもというわけにはいきませんが、確かにあります。」——線3「もちろん本を読めばいつでも、というわけにはいきません」とありますが、なぜいつでもというわけにはいかないのですか。文中の言葉を使って十五字以内で答えなさい。句読点も字数にふくめます。

問題は次のページに続きます。

二次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

著作権上の都合により文章の
掲載はできません

著作権上の都合により文章の
掲載はできません

問一

——線①③④は漢字に改め、②は読み方を答えなさい。

問二

——線1「ずっと昔のことだよ、おちびさん。もう今はたいしたことだとも思えないがね。わたしは、怒れる若者だったんだ」とありますが、テンダイはどういうことに対して怒っていたのですか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分のせいで、両親が政府によってどこかへ連れ去られてしまったこと。

イ サイ皮のムチでさんざんに打たれて、体じゅうミミズ腫れになったこと。

ウ 身分証明書を持っていないということだけで、警官にシャツを引きさかれたこと。

エ ほとんど毎日のように警官に止められ、身分証明書を調べられたこと。

オ 十八歳で何もかも失い、ヨハネスブルグの路上ですさんだ暮らしをしていたこと。

(ローレン・セントジョン『白いキリンを追って』

あすなろ書房)

注1 ズールー……南アフリカの一部族。

注2 ブッシュ……低木・やぶ。

注3 流暢……ことがすらすら出て、よどみないこと。

問三

A

B

に入る語句として適切なものはどれですか。それぞれ選び、記号で答えなさい。

ア さわいだ

イ 高鳴った

ウ 熱くなった

エ 苦しくなった

問七

——線3「ブッシュの言葉を学んでいる」とありますが、何のためにマーティンは「ブッシュの言葉を学んでいる」のでしょうか。ブッシュの言葉が何を指すのかを明らかにして説明しなさい。

問八

この文章から読みとることができる、マーティンの性格の説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 好奇心が強く、必死に勉強する人

イ 冒険心ぼうけんしんが強く、夢とあこがれを持つ人

ウ 感受性が豊かで、人の気持ちができる人

エ 努力家で、がまん強いところがある人

問四

——線2「敵が最も痛手を受けるのは、こっちがその敵よりずつとりつばな人間だということを見せてやること」とはどういうことですか。文中から五字以内でぬきだして答えなさい。

問五

C

に入る言葉として適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自由 イ 平等

ウ 平和 エ 幸福

問六

D

に入る言葉として適切なものを漢字二字で答えなさい。